

オレンジ色の誓い

青森県新郷村立野沢中学校

三年 佐藤 涼 夏

「今日はこいつの二十歳の誕生日なんだ。」父ちゃんはそう言って缶ビール二本のふたを開け、そのうちの一本を仏壇に供えた。そして、もう一本のビールを飲み始めた。えっ？ 誰の誕生日？ いったいどういうことなのだろう。私の疑問は増すばかりだった。

あとから祖母や母が教えてくれた。

二十一年前の冬のある日、私のお兄ちゃんは生まれた。夢と希望をもって生まれてきたであろう。両親や祖母は間違いなく喜んだであろう。なにせ、初めての子供であり、孫だったのだから。

しかし、その幸せは突然終わりを告げた。お兄ちゃんは赤ちゃんのまま死んでしまった。どうして死んでしまったのかは、聞けない。聞くと母が泣いてしまふから。私のお兄ちゃんは、これから待っている楽しみも苦しみも味わうことなく天国へ旅立った。

昨年の秋以来、私はずっと、友達関係のこと、学校生活のこと、勉強のことなどで思い悩むことが続いた。本当にイヤになって逃げ出したかった。幼い頃からとても仲の良かった幼なじみに誤解され、「嫌ってるんでしょ。避けてるよね。」と言われたことに傷つき、頭が混乱して自分で自分を苦しめ、学

校に行けなくなってしまった。このときは勉強への意欲がなくなり、成績は下がる一方で、母からもしかられる日々だった。

「どうせ誰も自分のことを分かってくれない。自分は一人ぼっちなんだ。」

と、しばらくの間、自分だけの殻に閉じこもっていた。

冬がやってきた。私は普段、陸上部員として砲丸投げに取り組んでいるが、冬場はスキー部の活動を行う。ただでさえスキーが苦手なのに、三戸郡冬季スキー大会ノルディック競技三連覇という周りからのプレッシャーが重くのしかかった。練習は厳しく、特にタイムトライアルが苦しくて、「三連覇したい」という思いと、「ああ、もう無理。苦しい。」という思いのはざままで押しつぶされそうになった。

大みそかの夜。私は仏壇に手を合わせていた。ふと周りを見回すと、少し色あせたクマのぬいぐるみとミッキーマウスがにっこり笑っているおもちゃの車が置かれてあった。母の思いがそこにあった。

お兄ちゃん、もっと生きたかっただろうなあ。もし生きてたら、今ごろ大学生かな。それとも働いてたかな。私、このごろよくよしてばかりで、全然元気ないんだ。なんで傷つくことばかり恐れて、前向きな気持ちになれないんだろう。なんでお兄ちゃんの分まで精いっぱいやってみようと思わないだろう。なんだか情けないよ。

私は、しばらくの間、仏壇の前でそんなことを考えながらお兄ちゃんと言葉を交わした。

元日を迎えた。あたりは雪明かりのせいではんわりと明るい。私と姉と祖母の三人は、戸来岳（へいりだけ）から昇ってくる朝日をじっと待つ。初日の出への願掛けは、小高い場所に立ち、遠く戸来岳を望むことのできる我が家の恒例行事だ。やがて、一年の始まりを告げ

る雄大な太陽が顔を出し、私たち三人をオレンジ色に優しく包み込んだ。

「うわあー。」

と、私と姉はふり絞るような声を上げた。横で祖母は顔を輝かせながら、

「いやあ、すごいすごい。」

という歓声を上げて拍手をしている。

姉は志望大学合格を、私はスキーも砲丸投げも県大会に出場することを、祖母は家族全員が毎日健康で幸せに暮らせることを願った。信心深い祖母は仏様にも毎日そのことを拜んでいる。いつでも家族思いな祖母に胸が熱くなった。そして、私は、

「お兄ちゃん、涼夏ね、お兄ちゃんの分の苦しみも楽しみも味わうよ。だから、二倍苦しんで、二倍楽しむよ。何にだって挑戦する。みんなが支えてくれるから、お兄ちゃんが見守ってくれているから、大丈夫だよ。」

と、元日の朝日に誓った。

二月五日、三戸郡冬季スキー大会。私たちの学校は、ノルディック競技総合三連覇を果たした。私は県大会にも出場し、周りからどんなに引き離されようと、歯を食いしばって完走した。そして、今年の夏、砲丸投げでも県大会に出場することができた。幼なじみとは、以前のように笑い合えるようになった。

これから先も、私の進んでゆく道にはさまざまな困難が待ち受けていることだろう。でも、私はくよくよしない。元日の朝日に誓ったことを忘れはしない。

私の二十歳の誕生日。今度は私がお兄ちゃんと最初にビールを飲むと決めている。

作文を書くに当たって

姉と私は今まで「兄」の存在を知らずに生きてきました。しかし、仏壇の前で父がつぶやいた意外な言葉が、この作文を書くきっかけになりました。一番伝えたかったことは、この先さまざまな困難が待ち受けようとも、元日の朝の「オレンジ色の誓い」を思い出し、何にだって挑戦していきたいということです。